

2020.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま
富 薬

5号

第42巻
No.370



ヒルガオ *Calystegia japonica* Choisy

(ヒルガオ科 *Convolvulaceae*)

生薬 センカ（旋花）夏から秋に根ごと掘り取り陽乾する。

成分 フラボノイド：kaempferol-3-rhamnoglucose、saponinなど。

効能 民間薬として利尿、疲労回復、強壮強精に煎じて服用する。虫刺され、切り傷に生の絞り汁を塗布する。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



国内、日が当たる道端や荒地など、どこでも生育するつる性の多年性雑草です。特に畑地などを好み、地下茎を四方に伸ばし繁茂するため、地上部を刈り取るだけでは絶やすことが出来ない嫌われ者で、地下茎を寸断すると各所から発芽し再生します。蕾は螺旋形に巻いている回旋状になることから漢名の「旋花」が名付けられました。夏には薄いピンク色で直径5-6cm、アサガオ (*Ipomoea nil*) に似たロート状の美しい花を葉腋に咲かせますが、午前中に開き夕方には閉じてしまう一日花で園芸植物には適しません。昼だけ咲いていることが和名の語源になりました。葉は互生し、葉身は特徴的で長さ5-10cmの鉾形-矢じり形、葉の先は鈍頭です。果実は稀にしか実らないため、種子繁殖は普通行われません。

他に本州以南に同属のコヒルガオ (*C.hederacea*) が自生します。全体がヒルガオより小型で、葉は鉾形で鋭頭、張り出した耳の部分が2裂します。花冠はロート形、直径3-4cmとヒルガオより小型です。またつるが砂浜を這い群生するハマヒルガオ (*C.soldanella*) や葉身が長さ5-10cm、幅3-7cmと広く、東北・北海道などでよく見かけるヒロハヒルガオ (*C.sepium*) も自生しています。

国内各地に自生し、可憐な花を咲かせる植物であることから万葉集に「谷花」、「可保我波奈」、「兒花」、「可保婆奈」の名で詠まれています。しかしこれらがすべてヒルガオを詠んでいるわけではありません。キキョウ (*Platycodon grandiflorus*) やオモダカ (*Sagittaria trifolia*)、カキツバタ (*Iris laevigata*) 説もあります。「美夜自呂の砂丘辺に立てる 貌が花 花な咲き出でそね 隠めて思はむ」の「かおがはな」は「すかへ」が砂洲や砂丘、砂浜を指していることからヒルガオ属植物の適地と考えられ、ヒルガオ、コヒルガオ、ハマヒルガオであろうと推測されています。平安中期の本草書『本草和名』(918)に「旋花 一名鼓子花(出拾遺)、和名波也比止久佐、一名加末」と、『倭名類聚抄』(931-937)にも「旋花 和名波夜比止久佐」と「はやひとぐさ」の名が与えられています。この頃はまだ「ヒルガオ」の名は登場していません。

江戸時代に入って『多識編』(1612)に「旋花 波也比登久左、今案ずるに比留加保(是れ鼓子花なり)」とヒルガオの名が出てきます。これ以降花としての価値も認められてきたようで、松尾芭蕉(1644-1694)は「昼顔に 米つき涼む あはれ也」と、小林一茶(1763-1828)も「とうふ屋が 来る昼顔が 咲きにけり」など、多くの俳句に詠み込まれています。園芸書『花譜』(1694)には「鼓子花 旋花ともいふ。其花白くして、浅紫なり。そのかたち、牽牛花に似たり。又白花あり。五月の節の後に花さく。蔓生じてはなはだ繁茂す。其根は賤民ほりととりて、煮て食す」と飢饉食として食べることで記されています。『大和本草』(1709)には「鼓子花 又旋花と云う二種あり。一種は葉に両岐あり。蔓長く三四尺あり、一種は葉圓く蔓短し。花は同じ」とあり、前者はヒルガオまたはコヒルガオ、後者はハマヒルガオと思われます。更に「根は蒸煮て噉うに堪え甚だ甘美といえり。花は牽牛花に似て淡紅色又白色あり。昼しほます。故に名づく」と根を食用とすることやヒルガオの語源を記しています。更に『救荒本草』(1406)を引用して「蓄子根も亦此れを與、同日根を採りて蒸して之を食う。或いは晒して乾かし杵き碎き、飯に炊き食うも亦好。或いは磨じて麩と作り、焼餅作り蒸し食う」と、続いて「根を塩に和して煮て食う。凶年には貧民根をほりて食し、飢えを助く。葉も亦食可」と救荒食であったことを強調しています。また『和漢三才』(1713)には「茎葉花根(甘滑微苦)氣を益し小便を利す。久しく服すれば筋骨を續き、金瘡を合す」と薬効を上げています。(村上守一 記)